

迎春「1011年」
忍ぶ恋
あらわれみえたるゆえ
忍ばずの女といふ
今年も生きる
をんなを唄ってゆきたい



忘れねば思い出さずに・・・

西松 布咏

新しい年がいつものように始まった。穏やかな日差しを浴びながらおせち料理を食べ、献杯をする。

ふと昨年末に繰返しテレビで放映された津波の光景が頭をよぎる。毎日の暮らしに忙殺され大震災のことを忘れてしまったかのような自分に呆然としたのである。

忘れないで欲しい・・・思い出して欲しい・・・は人間の偽らざる願望である。なのに日々埋没し被災地の方々のことを忘れて現実には生きている自分を恥ずかしく思った。

七草粥の宵、稽古始めの弟子を誘って東京ドームでの「ふるさと祭り」に参加した。居並ぶ店を足早

に過ぎ、東北の酒を真つ先に探し、ほろ酔い加減で我が美紗の会精鋭の男弟子が、地元連中に混じってねぶたの綱を引く行列に声援した。巨大な太鼓の上に跨って打つ力強い撥の音、最後尾に続く澄んだ笛の音と共に、聳え立つ屋台が半纏を着た人々の手でゆっくり目の前を過ぎてゆく。華やかではない地面を揺るがすその一瞬に日本人の血が甦り、被災地からの無言のメッセージを受け、頑張れ東北！の文字が涙に霞んだ。

大震災直後に始まった「アジール公演」は長きに亘る試行錯誤の中、昨年末に京都と東京の寺院で幕を閉じた。私は高尾太夫になり「忘れねば思い出さずに候かし」の言葉を「伽羅の香り」を唄う前に繰り返した。「私は貴方を片時も忘れることがないの

で思い出すことはないのです。でもあまり御目文字がないと忘れてしまいますのでどうぞ御越し下さいまし」このやんわりと微妙な二ユアンスの玉章で仙台藩の伊達綱宗公の心をつかんだ二代目高尾の言葉は私に様々なことを問いかけてきた。

綺麗ごとで生きてゆくことは出来ないから人間は悩み苦しむのだけれど、もし夢の存在がいたらやはり憧れ惹かれてゆくものだろう。だから廓の女は嘘と誠の間を生きてゆくことを強いられた観音様になつて行く。でも女だつて逃げ出したくなることはある。そこにアジールである避難所や隠れ家が必要になり縁切り寺が出来たのだろう。

しかし吉原の遊女は逃げなかった。逃げられなかった。下界との間に吉原大門が厳然と立ちほだかり、意地と張りで生き抜くしかなかったのである。

片時も貴方を忘れないと煙草の煙のように男を翻弄しておきながら、その実は「めりやす・もみじ葉」の一節のように、〈憂いぞ辛いぞ勤めの習い 煙草呑んでも煙管より 喉が通らぬ薄煙 泣いて明かさぬ



夜半とてもなし」と親同胞の為に流れの憂き身となつた過去を忘れたくて煙草の煙で涙を隠すのである。

夢と現実。光と影。昼と夜。好きと嫌い。嘘と誠。美と醜。廓の世界はこの相反する【間・あいだ】で様々な物語が生み出されていった。

今回の公演は多岐に亘るジャンルの方々が御越し下さつたが、なかでも仕事を調整してフォトジャーナリストのエヴァレットブラウン氏が開演時間に間に合い、終演後、「来られて良かったよ！感動しました。現代人の僕達が忘れていることを思い出させてくれて有難う！」と笑顔で語って下さり嬉しかったです。公演後の出演者によるトークで司会者が「布咏さ

んにとつてのアジールは？」と私にマイクを向けた。「なんと厄介な三味線と生きてきました。思うようにならないから続けられたと思うのです。忍ぶ恋のように・・・でも此の頃ようやく、唄のなかの様々な女と語らうことが出来るようになりました。これからは忍ばずに生きてゆきたいと。私にとつてのアジールはこのひとときです。」

そして私のもうひとつのアジールは弟子との差し向かいの稽古である。日々の積み重ねのなかで美紗の会を続けて来年で四十年になる。今年は五代目にして初めての女性会長も誕生した。それぞれに生きる場は違っても一つのことを共有出来る幸せな時間である。震災の後、ますますその時間がかけがえのないものになってきた。

高尾太夫のように今年も声を限りに、忘れねば思いうさずに・・・のメッセージを語りかけてゆこう。日本人に生まれたことを忘れないように、生きて在ることに感謝しながら。

会長就任の挨拶

大久保 朋子

新しい年を迎え、今年は穏やかな年であります様と願う方が多かったのではないのでしょうか。昨年は普通に生きることの幸せをつくづく感じる一年でした。昨年の暮れ、師匠から、小高さんが美紗の会の会長を引退されるので、私に次の会長を、とのお話がありました。女性初めての会長でもあり、私には荷が重いと申しましたが、古い順とのこと。(古いといっても年ではありませんよ！) 弟子になった順とのことでお引き受けすることになりました。

師匠に弟子入りしたのは二十四年前、今年で二十

五年目に入ります。なんと四半世紀近くです。忙しい仕事合間の細々とした稽古でしたが、心優しく『芸に厳しい』師匠に鍛えられ朋味という名もいただきました。バックの中にウオークマン、師匠の声と三味の音がいつも私の道連れでした。これからもきつとずーっと・・・。

先輩方から受け継がれてきた美紗の会の会長というタスキを次の方に渡すまで微力ながら力を尽くしたいと思っております。



縁切寺／生きるために逃げ切る

飯名 尚人

十一月十一日、縁切寺(満徳寺)での演奏を聴くのは二回目となった。薄らと雨の降る日の演奏会となったが、演奏の合間に聞こえる小さな雨音が、なかなか味わえない環境音楽となつて心地よい。この日は、西松さんと一緒にさせて頂く舞台『アジール』の京都公演一週間前であつたことも、僕にとつては様々なことを考え、さらに自分の作品について悩む良い時間となつた。公演で演奏される唄「一日を」「嘘とまこと」「高尾」の三曲もこの日演奏され、自分の曲の解釈はこれであつていだろうか、お客さんに伝わるだろうか、などなど、西松さんの演奏を聴きながら、ひとつひとつ確認していく時間となつた。そういう時間を縁切寺で持てたことは不思議な時間でもあつた。というのは、『アジール』という作品そのものが、ここ縁切寺ではじまったからなのである。

『アジール』という舞台作品は、映像、シナリオ、演出を僕が担当し、西松さんには唄と三味線と語り。京都の振付家・寺田みさこさんも加わり、三人の共同制作という形で二年間の創作期間で制作された。二年前に満徳寺(群馬の縁切寺)での西松さんの演奏と語りを聴き、『アジール』のアイディアを発案したのであつた。

この作品では、様々な境界を描きたかつた。縁切寺の敷地に髪の毛一本でも入ったら、男は女にもう触れてはならない、という話も、これもまた境界線のエピソードである。男／女、静／動、恋／愛、天国／地獄／生／死、対峙するイメージの境界線を見出し出したのであつたのである。その境界線の最重要

シーンは、冒頭の西松さんの語りのシーンである。冒頭二十分は西松さんの普段の演奏シーンをそのまま演出に入れ込んだ。一曲毎に演奏と語りを繰り返す演出である。ダンスと演奏のセッションだと聞いて見に来たお客さんにとっては、いつまでたってもダンスが登場しない不思議な舞台であつたと思う。しかしこの冒頭二十分が僕にとって最重要で、この作品がこれから語りあげてゆく世界の「予兆」なのである。冒頭の三曲『一日を』『嘘とまこと』『伽羅の香り』、これらの間に語られる西松さんの「遊女と煙管の関係」「伽羅というのはお香でもあり、男



撮影：草本利枝

のこともある」「嘘とまことの間で、男と女は遊びを楽しむ」・・・と曲にちなんだエピソードが語られる。何気なく語られるキーワードが、後のシーンで再現されていくことになるから、イメージを言葉で凝縮したシーンなのである。実はこの『アジール』という作品には台本というものがない。よって西松さんの語り部分も明確に言い回しが決まっているわけではない。すべて西松さんの言葉で語られていくため、どこまでが台本でどこまでがアドリブなのかがお客さんにも分からないようになっていく。

語りが終わると芝居がかった口調で「私はただただ逃げているのです。これからの物語は、すべて私の話でございます」と台詞。ここから描かれる世界は全て虚構の世界です、ということをお客さんに伝えるためである。現実と幻想の境界線を、西松さんに舞台上で宣言して頂いたことになり、ここからぐぐぐと虚構の扉が開くのだ。舞台でどうやって嘘をつくか、というのが僕にとっては醍醐味である。

嘘が上手過ぎてダメだし、嘘が下手では舞台にならない。その境界線を誰が引くか、その扉を誰がいつ開けるかというのは、非常に重要であり、その人は舞台の虚構のすべてを担う役割となる。今回は西松さんがすべての境界線を引く役割であつた。そのあとはすべて様々な境界線を行ったり来たりする。現実と過去、男と女、この世とあの世、等。

縁切寺に逃げてきた女の話、という構想から、出演陣によって様々な解釈が生まれ、不思議な作品が生まれた。逃げる女のようにも見え、立ち向かう女にも見え、その背後に見え隠れする男の姿もあらわれる。縁切寺にまつわる人間模様、なんとも男と女の愛くるしいドラマがある。昨年の震災以降、逃げる、という言葉はネガティブであり、よい印象を与えないだろう。しかし生きるために逃げて来た人々



撮影：草本利枝

がそこにはいる。逃げることに逃げないことは同じような行為にも見えてきて、その矛盾こそが人間模様ともいえる。どちらも生きることの前提としていると感じる。思えば縁切寺に駆け込む女たちも、したたかだろうと何であろうと、生きるための切実な行為なのである。いずれこの『アジール』が満徳寺・縁切寺で上演できたらなあ、と思っている。唄にはすべてドラマがあり、どこを掘り下げても面白い舞台台本ができるようであって、まだまだチャレンジしたい題材は汲めども尽きず、縁の切れない創作が続きそうだ。



「ASYL」を見て

荒木 基次

京都の黒谷（くろだに）といえは、京都の中でなかなか不思議なスポットでもある。思えば、ここで田中旭泉さんの琵琶で『平家物語』も聞いたし、味方玄さんの『敦盛』追悼の能と叡山の声明も見た。おまけに今年は「法然上人八百大遠忌」だ。大河ドラマでは「春日局」まで出てくる。東日本大震災でのつながりを言えば会津藩士の菩提も叩いている。いろいろ思いを巡らせながら、烏丸丸太町からタクシーに乗った。

昼間の篠つくような雨の話題になって、運転手がしゃべりまくる。うつつうしいなと思いつつながら相づちを打っていたら、「もう大丈夫でっしゃろ、夕焼けみたいですから」と言った。首を回すと重くたれ込めた灰色の雲の向こうに茜色の空が一筋、刷毛で履いたように見えていた。

金戒光明寺の山門に入って、タクシーはさらに上の塔頭へ。「永運院」の前には小さな案内が出ていた。案内の方が立っていて、門の中のさらに坂の上の入り口を示される。坂を上りながら振り返ると、眼下に遠く、京都タワーがそれこそ小さなお灯明のように煌めいていた。

今回の公演タイトルは「ASYL」。アジール＝避難所という意味は駆け込み寺を掛けているという。作・演出・映像は飯名尚人さん、ダンスが寺田みさこさん、そして三味線・唄が西松布咏師匠だ。

「お寺でダンス？ 江戸唄でモダン・ダンス？」という、似合うかどうかの不安というか疑問は、すでにパンフレットのビジュアルで、私の中では解消していた。布咏師匠と寺田さんの凛とした立ち姿で



撮影：大橋翔

それは充分に納得していた。問題は具体的な限られたスペースの中で成立するのかどうかだった。廊下に沿って締められた障子と座敷に横長に設定された観客席とで奥行きはあまりない。だが、これが逆に見事な三層の空間演出で昇華されていく。

道行きもそうだが、駆け込み寺までの「道中」が横長の舞台で見事に表現されていた。そして閉め立てられた障子に映される映像と向こう側のダンスをシルエットで示される演出。そして開け放たれた障子の向こうには枯山水のお庭。ダンスと唄と映像の三種が見事に調和して、物語空間をたっぷり味わうことが出来た。

小唄「一日を」
端唄「嘘とまこと」
端唄「伽羅の香り」
歌沢「お月さん」
端唄「きりぎりす」
小唄「水鶏くいな」
長唄「都風流」
めりやす「高尾 もみじ葉」
ジャズ「What's New？」
ジャズ「You'd be so nice to come home to」

障子に沿って長々と敷かれた緋毛氈の中央の演台は、シヨッキング・ピンクが混じったような緋色のシャギーで覆われている。最初は布咏師匠の小唄から始まる。曲の合間には、若い人への親切だろうか、珍しく布咏師匠の「吉原」や「煙管」の解説が入る。花街も色町も花柳界も苦界も、本や絵の中の世界になってしまった。いまや煙管はおろか、タバコさえも消えようとしている。映像の中の寺田さんのタバコの吸い方が美しい。淡路恵子さんの本の広告に「女性に取ってタバコは第六本目の指」とあったが、綺麗にタバコを吸う女性の姿も少なくなった。寺田さんはなかなかのチェーン・スモーカーらしい。（ちなみに永運院には、古刹には珍しく「喫煙場所」があった。有難いことだ。）

「高尾 もみじ葉」では、「煙草吞んでも 煙管より 喉が通らぬ 薄煙」とあるが、三味の音と黒いドレスの「ヴォーギング」と煙草の白とシヨッキング・ピンクのシャギーが、時代を超えた色模様となっていた。そしてヘレン・メリルの「What's New？」から、布咏師匠の「You'd be so nice to come home to」へ移行して行き、時代が溶けあつた男女の恋愛物語へと、観客はすっかり「うつつ」の世界へ連れて行かれた。

障子に映し出される「老松や孔雀」、そして「泳ぐ金魚」がゆらゆらと遊女の生きたまを暗示させる。枯山水、フィラメントの電球、シャギーと、時代の違う質感が違和感無く溶けあつて行く。時代を超えた男女の色模様というより、「駆け込む」しかなかった女の人生、幸せな日々へ戻れない女の情感をたっぷり味わえた作品だった。

情念の 炎を秘めて 濡れ紅葉 雪破

流されて 雨を恨むや 紅一葉 雪破

錦秋に 濡れてさみしや 京の宵 雪破

熱・エロス・自由・タナトス

ヤリタ ミサコ

「逃げる」のは、過去の否定なのか、未来への跳躍なのか。放り出すことなのか、判断停止なのか。何からなのか、どこへなのか。意志なのか運命なのか。勇気ある亡命、生から死へ、死から生へ。急激な変更を自ら発生させる行為。

自分に巻き付いている価値観から脱出するのが、女が逃げる。他人から名づけられた名前と呼ばれた自分ではなくなること。自分だけの自分には、名は不要。他人の視線の届かないもつと先に自由がある。理由は要らない。窮屈と感じた瞬間に、体は自由へと動き始める。

西松布詠さんの唄う遊女たちの心情とは「男から見た、こうであってほしい女心」とのこと。来ない男を待つじらしい女心といった内容は、男の願望か。とすれば男の視点での「逃げる女」とは、異性の眼差しを撥ね返して自分の意志を貫く女だろう。男から見たら、傍若無人我儘勝手筋道の通らない感情を奔出させる女。

だから八百屋お七が火をつけるとき、高尾太夫が身受けを拒否するとき、男の論理では理解不能でアンキーな狂気。しかし女にとっては自分の意志が阻まれることへの激しい抗議であり、自分の思いを実現するための身を滅ぼすほどの強い衝動である。損得ではない。本人ですら持てあますほどの熱なのだ。寺田みさこさんの身体を通して内側から自噴してくるエネルギーが、静かな激しさをこちらへ送ってくる。タバコの煙をまわりつかせるアンニユイな映像では、時に視線を撥ねつけるようだ。障子に映る影は、格子の縦横の線が女を束縛する縛りのように見え、息苦しくなる。しかし一転、明るい赤の金



撮影：大橋翔

魚とコラボレーションでは自在に泳いでいる。寺田さんも金魚たちと同じく、屈託なく自然で誇り高く心のままに自由だ。高尾太夫もお七もその身体の死後には、この金魚や寺田さんのように魂の自由を獲得しただろう。自分が決意した死とは、究極の自由なのかもしれない。

映像と寺田さんが都会の速度で逃げる女を提示するのに対して、布詠さんの唄は艶っぽい江戸の遊女の語り。現代のスピーディーな女に対して、江戸の遊女は騙すも遊びも本気も浮気も入り混じったの情愛。男の理想を演じていると見せて、その実、女心の真実はその逆の逆？かもしれない。一夜の妻を演じ、恋人を演じ、執着も嫉妬も見せておいて、遊女たちは自分だけの心をそこからすると逃れさせている。布詠さんの声は幾重にも重なった感情の、微妙な陰影を響かせる。速度と線で逃げる現代の女と、層と面で逃げる江戸の女。紙一重のエロスとタナトス、唄に隠されている。

布詠さんがカバーするヘレン・メリル「You, be so nice to come home to」は、予想外の快樂だった。原曲のクールな溜息とは違って、湿度と陰りと恍惚の表現がすばらしい。恋人に会いたいと夢想するラブソングの歌詞に対してヘレン・メリルは乾いた表現をしているが、布詠さんの唄には待つ喜びと切なさ垣間見えていた。

寺田さんの身体、布詠さんの唄、映像と光と影、一人の男、これらのレイヤーが一瞬重なり、また別の時間を進行し、ズレては衝突しながら、江戸と現代の男女の永遠のわからなさを描いている。スパークしては知らない顔をしてすれ違っていく男女。乾いている湿度、冷たい熱さ、速度のある緩やかさ、見るものであり見られるもの、男と女、真実の騙り、エロスとタナトス。

裏の裏

縄岡 好人

アジール公演の西と東を通して観た。

近年の我が国は個人主義や成果主義が強調され、ものごとの一元論的な捉え方や見せ方が主流となり、日本の風土で培ってきた日本人独特のものごとを対比で見るという能力がだんだんと衰退してきているように感じていた。

そんな中、アジール公演は、その見せ方が、明と暗、自由と束縛、動と静といったものを対比で見せる二元論の見せ方がされており、忘れがちであった日本人独特の見せ方を思い出させてくれた。

公演会場はお寺。舞台空間は和室・廊下・庭。これらは、それぞれ障子・ガラス戸・庭木・塀で仕切られ多層の境界を構成している。多層の境界は和室に設えられた客席の位置によって見える範囲が異なり、表情も変わる。観客は座った席によって個々に作品を自由にイメージして楽しむ場となっていた。

結果では情念のドラマが、映像と唄と三味線とダンスのコラボレーションで展開していく。それらのセッションは、ある種の微妙なズレ感をもって進行していった。邦楽の間を思わせるつかず離れずというか、計算されているようでびつたつとはまらない、言うに言われぬズレ感なのだが、これがなんともアシーでブルージイなのだ。

エンディングで師匠が「You'd be so nice to come home to」を唄った。「Lover come back to me」と遊女が情夫に耳元で告げているような情念と艶だ。

ふと、ヘレン・メリルのLPがリリースされたとき、英語の直訳は「私はあなたのいる家へ帰りたい」

だけど、最初に付けられた邦題は「帰ってくれたら嬉しいわ」だったなあ、と昔のことを思い出した。そのとき頭の中で、ゆつくりと今まで見てきたシーンがリピートし始め、境界の反対側となる庭側からガラス戸越しに舞台を見ている自分がいた。

牢獄の鉄格子のように見える障子の棧越しに憂鬱そうな表情を見せていた寺田さんが、白い壁のように見える障子紙をバックにゆつたりと微笑んでいた。逃げても逃げてもその前方には常に鉄格子が存在するようだった寺田さんが、今度は待っていた恋人を見つけたように駆け寄ってくる。



撮影：草本利枝

障子に映った煌々と昇る満月は、こちらでは昇らず闇の夜だった。漆黒の闇の中に灯明がガラスに反射して無限の虚像を作っていた。

そしてみじ葉の高尾は・・・煙草の煙のような生きから究極のアジールに辿り着き永遠の自由を得たはずの高尾が「You'd be so nice to come home to」と唄っていた。

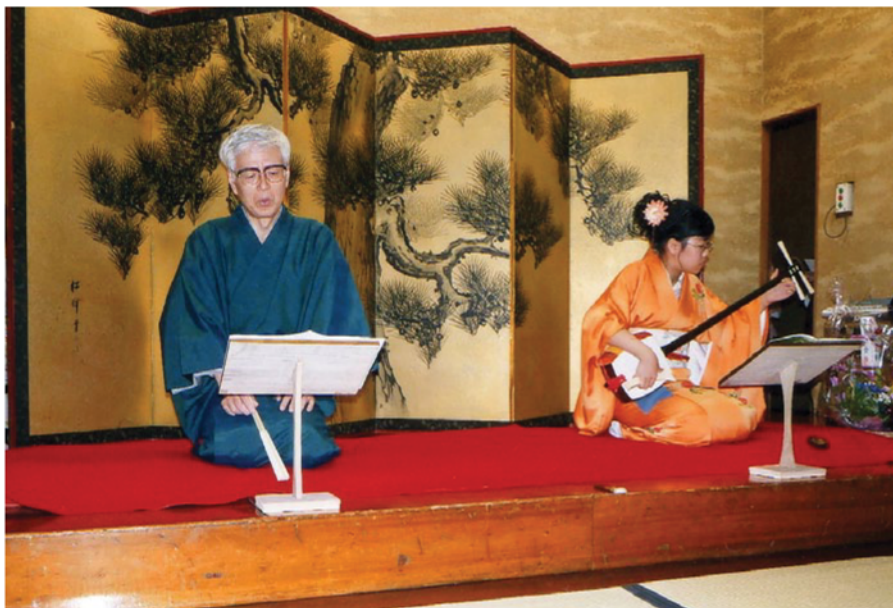
女は何から逃げたのか？女のアジールとは？謎は深まるばかりだった。

第四十二回美紗の会に出席して

高橋 祥次

◇はじめに 美紗の会の開催前、一週間ほどは複雑な気持ちで過ごしました。布咏師匠のもとに、家内から背中を押されるようにして通い始めてこの正月で満二年。今回が、私にとっては四回目の会となります。少しは小唄らしくなったかな、という期待が三分の一、家内が見立てた着物を着る気恥ずかしさが三分の一、そして三味線の糸をひく娘の伴奏にうまく合うかどうかという心配の気持ちで三分の一というところでした。

そもそも、私達夫婦が美紗の会に参加させていだいたきっかけは、前号で新日屋の塚本さんがお書きになった「神田の家」での布咏師匠の独演会に家内が参加して、一遍にその唄、特にその声に魅了されてしまったからです。四十年以上も前、尺八と琴のお稽古が縁で一緒になった我々は、元々日本の古典芸能に強い関心を抱いておりましたが、お互いに仕事や子育てに忙しく、趣味を楽しむ間もなく過ぎてきました。私が退職したのを機会に、これからは夫婦で一緒に楽しめる趣味を持つとういうことで、



最初はヤマハ大人の音楽教室でオカリナを始めました。教室の発表会などもあり、生（なま）のバンドと一緒に合奏など楽しかったのですが、丸三年をすぎたところで指導の先生の都合による退任をきっかけに退会したちょうどその時期に、布咏師匠にめぐり合ったというわけであります。家内はかねてから日本文学科で古典を学ぶ三女枝里子に何か邦楽のお稽古を習わせたいと秘かに思っており、布咏師匠こそ求めていた方だと直感したようです。娘も美紗の会「たより」を読み、美紗の会を見学して、師匠や

会の雰囲気につきり魅せられ、我々の半年遅れで入会させていただくこととなりました。

◇当日の模様 第四十二回美紗の会は、十月三十日正午から浅草一松で開催されました。前回は東日本大震災から間もなくのことであり、師匠も開催すべきかどうかかなり悩まれたようですが、師匠の「心を込めて唄うことが私たちに今できること」との思いが会員皆様の気持ちにつながり、大変意義深い会であったとしみじみ感じました。

それから半年余。大震災は「人の絆」の大切さを教えてくれましたし、単に世の中を元のままに復旧するのではなく、新しい時代に向けて復興し進んでいくべきだということを示してもおります。師匠からはそのような思いも込めて、これからは「一人一人誠心誠意、前向きに取り組んでいきましょう」というご挨拶があり、同じようなことを感じていた私は「そうだ、そうだ」と心の中で大きく肯きました。

前回までの「赤坂泉クラブ」が大震災で損傷を受け閉鎖されたことから、この度は浅草の一松に会場を移して開催。路地からほぼ完成したスカイツリーを眺める下町の、古風な塀を回し、池のある前庭の水を打った敷石を踏んで玄関に達する、趣ある料亭の二階大広間が新しい会場です。小ぢんまりとした中にも一応の形が整った舞台で、松が描かれた金屏風を背に、華やぎのある、そしてちよつと緊張した演奏会となりました。

今回は岐阜の粋艶会の皆様が十数名ご参加くださり、普段にも増した賑やかな演奏会となりました。師匠から時折その様子をお聞きするだけでしたので、直かに演奏を聞かせていただくのを心待ちにしておりました。大変年季の入った方が多いと窺っていた通り、さすが声の調子、節回しといい、粋な雰囲気、品に品の良さが加わった唄い振りに、思わず聞き

惚れてしまいました。懇親会では、「美紗の会の皆様も粋艶会には是非ご参加ください」とのお話。鶺鴒の季節には浴衣会もあるそうで、家内は大乗り気。女房孝行も兼ねてお邪魔してみようかという気持ちに誘われております。

特別出演として、春風亭正朝さんが会の最後まで参加くださいました。夏に神田明神で開かれた布咏師匠との二人会「江戸小唄と落語の会」での演目「唐茄子屋政談」の中で披露された「のび上がり」を聞かせてくださいました。思わず、あの時の唐茄子売りの様子とおかしみを思い出し、笑みがこぼれてきたのは小生だけではありますまい。懇親会でも小話をご披露いただき、やんやの喝采でありました。それとは気が付かなかった夕方の雨も止み、ほろ酔い気分、浅草寺本堂近くの津軽三味線茶屋「吉幸」に場所を移しての二次会。本番には間に合わなかったお二方の演奏が行われ、大きな拍手を受けました。歓談尽きることがなく名残惜しかったのですが、閉店の時間となり、今回の美紗の会の幕となりました。

◇小生の出来映え寸評 ある大先輩が家内に伝えてくれた寸評「ご主人も少し、小唄らしくなったね」。嬉しい限りです。娘の応援に駆け付けてくれた友達の評「お父さんの声は良いけれど、唄はお母さんの方が上手」。厳しいですが、これも現実。次回を目指し、稽古に励むことにしましょう。

美紗の会のひびきに参加して

水谷 博昭

西松布咏師匠に御指導いただいている岐阜粋艶会のおさらい会には、いつも美紗の会から山中幸子さ

んらの応援出演をいただいている。そこで今回、お礼と研修を兼ねて十三名の会員が参加し、それぞれ好きな持ち唄を披露させていただいた。我が粋艶会の多くは小唄歴二十年程度であるが、普段からの心掛けの濃淡によって力量に差がついて来ていると思っている。美紗の会の皆様にはどのような評価を受けたらうか。

私は初めて参加させていただいたのだが、老若合せもつ会員層の厚さと個々の会員、特に箕輪心中を唄われた方の美声と芸、そして名取りの方々の技量の高さに感動した。また、かたせ梨乃さんの三味線デビューや特別出演の春風亭正朝師匠の小唄も披露され華やかで楽しい会であった。

岐阜粋艶会は美紗の会の会員層の厚さと技量の点に於いて比肩すべくもないが、更に一層努力する必要があると感じた。

親睦会は更に一層楽しかった。

特に、美声で会場を魅了したお名取さんや華やかだ若き女性群の飲みっぷりが印象深かった。

私は三重県のある小さな漁師町で少年時代を過ごし、酒量の多いことを男の名誉と考える若い漁師達が網元宅の新年会で一升瓶を抱えてコップ酒を酌み交している光景を今でも心地良く覚えている。

演奏後の高揚感・開放感ゆえなのか、酒が旨かつたせいか、我々を歓待してくれているのか定かではないが、女性陣のコップ酒の酌み交し方はそれよりはるかに豪快で、東京の女性はすごいと再び感動した。

私は、名古屋で四十年弁護士をやっており、最初の頃は所属会派の半数位の人が小唄等の一芸を持っており、忘年会や新年会では名妓連の芸者を多数侍らせる芸が披露されたものだ。然し、長老達が徐々に消えていき、二十年位前からは幹事も芸者を呼ば

なくなり、代りにコンパニオンやクラブの女性が来るようになった。小唄は、最近では宴会の余興ではなくなっている。だから、今後は座敷で披露し合う三味線音楽を初めとする伝統芸能は、日本固有の伝統文化と位置付けて、私達が守っていかなければならないと思っている。



《今後の予定》

- 一月二十八日(土) 午後三時開演
芝浦港南区民センター
江戸唄と落語を楽しむⅢ
唄と三味線 西松 布咏
落語 春風亭 正朝

- 二月十二日(日) 午後三時開演
岐阜・今町かわらや大広間
第九回 粋艶会のつどい
粋艶会一門唄い初めと新年会
- 四月八日(日) 午後一時開演
グランドアーク半蔵門・曙の間
第四十三回 美紗の会のつどい
美紗の会一門演奏会と親睦の夕べ

■ たより 第71号

発行者 美紗の会
編集責任者 大久保 朋子
デザイン 近藤 幹則



■ 美紗の会

主宰 西松 布咏
稽古場 港区白金台三ー二ー二
白金台プレイス三階
電話 (三四四一) 一七二六
(五四四七) 一四一一
E-mail : nfue@soleil.ocn.ne.jp
URL: http://www17.ocn.ne.jp/~misas